

《事例発表》  
《사례발표》

在日コリアン特別養護老人ホーム  
「故郷の家」の活動報告

---

재일코리언을 위한 특별양호노인홈  
“고향의 집” 활동보고

尹 基  
윤 기

日本 社会福祉法人こころの家族 理事長  
일본 사회복지법인 마음의 가족 이사장

# 在日コリアンのための特別養護老人ホーム 「故郷の家」の活動報告

— ひとりのソーシャルワーカーとして —



尹 基  
日本 社会福祉法人こころの家族  
理事長

## 1. 在日コリアン老人ホーム「故郷の家」は市民によってつくられた

在日韓国高齢者福祉の必要性に対する市民の強い支持

- 1) 日韓歴史の犠牲者だという歴史認識
- 2) 贖罪するクリスチャンの心
- 3) 韓国に対して友情・友愛を感じる市民・文化人
- 4) 過去、韓国人にお世話になった人々
- 5) 文化を尊重する福祉が必要だという福祉専門家の協力
- 6) 在日韓国人の期待
- 7) マスコミの積極的な報道・協力

## 2. 在日韓国老人ホーム故郷の家はどのようにつくられたのか

### 1) 問題の発見 孤独な死

孤独な在日コリアンたちには、かけがえのない「ふるさと」である老人ホーム故郷の家の建設運動が始まったのは、1984年のことでした。孤独な在日コリアン高齢者の死の記事に直面し、悲しい出来事を繰り返さないために、みんなの手で在日コリアンのふるさとを作ろうと決心し、運動をおこしました。

## 2) 問題を社会に知らせる 論壇で運動の提唱 蒔かれた一粒の種

この投稿は、全国に大きな波紋となって広がりました。駐韓日本大使だった金山政英氏をはじめ俳優の菅原文太氏、そして、キリスト教関係者へと共感の輪が広がったのです。

「最近愛知県でおきた在日韓国老人ふたりの孤独な死。ひとりは死後13日たって発見され、もうひとりは火災にあって病院で死亡したが、遺体の引取り手がない、という。悲しい話である。このふたつの事件は在日韓国社会に大きなショックを与え、高齢化問題に不安をなげかけた。急速なテンポで高齢化社会へ突入している日本の中で、忘れてはならないのは在日韓国人の高齢化である。

日本の戦時政策によって来日させられた韓国人1世たちは、既にかなり高齢化し、70歳以上の人だけでも約1万人と推定される。その中の約1400人が経済的にも家庭的にも恵まれず、老人ホームの入居を緊急に必要としている。70歳以上の数、及び老人ホーム入居必要者の数は、在日韓国・朝鮮人総数70万人という数字を見れば、日本人の高齢化と同様ふえ続け、問題化してゆくことは明かである。

日本の福祉の手は、生活保護費の支給、老人ホームへの入居など、在日韓国人たちにも差別なくさしのべられている。だが、在日韓国人に対しての老人対策は、果たしてそれで十分と言えるであろうか。否である。

なぜならば、老人ホームの門は開かれているとはいえ、両国の長い歴史の中でわだかまりや、生活様式の違いなどから、在日韓国人の多くは現在の老人ホームに入りたがらぬ現状があるからである。それを単なるわがままとだけで片づけられぬ程、両国の間には深い歴史の傷があることは否めまい。

日本の朝鮮総督府官吏の娘であった私の母は7歳から韓国で育った。26歳の時、木浦で孤児のために粗末な施設を開いて献身する韓国人伝道師、尹致浩と結婚。朝鮮戦争で夫が消息を絶った後も、孤児たちと共に韓国で生きる事を決心した母は、韓国語を使い、いつもチマチョゴリを着ていた。50年を韓国で暮らし、孤児の母と慕われ、母は韓国人になり切っていた。だが、病に倒れ、意識のうすれる中で私に言った言葉は、日本語で、「うめぼしが食べたい……」であった。その言葉は、郷里の高知を思う気持ちが言わせたのか、あるいは、切るに切れない民族の血が言わせたのか……。

在日韓国人の老人問題を考える時、私の胸は詰まる。あの日、あの時の母のように、在日1万人のハラボジ（おじいさん）ハルモニ（おばあさん）たちが日本の土になろうとする時、韓国語で「キムチが食べたい」と、そうつぶやくのでは

ないか、と。

私は、故郷に帰るに帰れない在日韓国老人たちのために、同胞同士が、故郷の暮らしに近い環境の中で、安心して生活できる韓国人専用の老人ホームを建設するよう、ここに訴える。来年で日韓条約締結二十年を迎えようとしている今、日韓両国が手をつないで、在日韓国人のための老人ホームを作ることこそ、真の友好と言えるであろう。

韓国の古都・慶州に、孤独な日系婦人たちの老人ホームがある。十年前創立されたこの『ナザレ園』の中で使われているのは日本語だけだ。それぞれの部屋から浪曲や日本民謡が気ままに流れ、壁には富士山の写真が張ってあったり、夫の位はいにお線香が上げられていたり……。そして、食事にはタクアンや梅干しが並ぶ。

そこには韓国の福祉の保護のもと、故国の慣習にのっとりた自由な生活をしながら、天寿を全うしようとしている日本老人たちの姿がある。

同様に、日本で韓国老人たちがオンドルパンに寄りそい、お互いに韓国語で話し、キムチのカメが並ぶ故郷を思わせる庭で民謡を歌い、キムチを食べ……。そんな老人ホームの建設を！」(1984年6月18日付 朝日新聞論壇)

### 3) この問題に関心のある人たちを集める

共感の輪が運動の輪へと歩みを進めたのは、同月、東京で開かれた小著「母よそして我が子らへ」(これが後に「愛の黙示録」として映画化される)の出版記念会のことです。

この席で、「在日韓国老人ホームの建設」を呼びかけたところ、ご出席者全員の賛同を得たのです。

これを受け当時、お茶ノ水にあった「共生福祉財団東京事務所」で「在日韓国老人ホームを作る会」の設立準備が進められました。

### 4) 集った人たちで組織 芽をふいた「一粒の種」 作る会の誕生

募金運動の組織づくりの呼びかけが始まったのは、1984年12月のことです。出版記念会出席者の協力でまとめられた名簿をもとに「在日韓国老人ホームを作る会」発起人会づくり。「在日韓国老人ホームを作る会」の世話人32人の賛同を得て、各界の指導者3,000人に発起人を依頼する文書を発送し、発起人としての参加をもとめたのです。

## 5) でき上がった組織で方法を探す

そして、1985年2月、「在日韓国老人ホームを作る会」が正式に産声をあげました。それまで世話人として活動を続けてきた32人と発起人500余名で、在日韓国老人ホームを作る会が発足され、運動を本格的に始めました。

### ◆キャッチフレーズ

「誰だってふるさとが必要です」

「私たちの手で韓国朝鮮人の老人ホームをつくりましょう」

「1万円を寄付してくださる方が3万人おられれば、老人ホームができる。

あなたも3万人の1人になってください」

### ◆募金の方法：会員制

一般会員：1口	1,000円
賛助会員：1口	10,000円
一坪会員：1口	350,000円（堺）450,000円（神戸）
維持会員：1口	1,000,000円
名誉会員：1口	10,000,000円

## 6) 募金は市民参加型で

建設地が大阪・堺市に決まったことを受けて1987年7月4日、大阪府社会福祉指導センター内に、「在日韓国老人ホームを作る会大阪事務所」が開設されました。続いて、9月7日、同会大阪実行委員会が開かれ、委員長に原田憲衆議院議員が就任されました。ここで、老人ホーム名を「故郷の家」にすること、運営母体として「社会福祉法人こころの家族」を設立することを発表しました。

事務局に送られてきた激励文に次のようなものがありました。匿名希望の婦人です。

「このたびはパンフレットなど、いろいろお送りくださってありがとうございます。私は半身不随の夫と暮らしておりますが、夫は昔から体が弱く余り働いた事がなく、いろいろと私は苦勞をしました。何も自慢する事はありませんが、苦勞だけは自慢できます。それも普通の苦勞とちょっと違います。私にはお金もありません。恥ずかしいことです。息子たちも家賃を払っていて大変です。私の言いたいことは、とにかく老人ホームを建てることについて、とても嬉しいです。でも応援する事が

できないのが残念で、残念で、しょうがありません。だからとても心苦しいのです。これは、(1万円在中)私の気持ちです。これでテッシュペーパーかトイレットペーパーくらいでも、と思い送ります。学校には2年しか行っていないので読みにくいと思いますが、お許しを……。とにかく頑張ってください。実現、実行されるよう祈ります。祈っています。ありがとうございました」

事務局ではこの手紙に感動し、何度も読み返したものです。こんなに自分のことのように喜び、祈ってくれる人がおいでになったのです。大勢の市民が参加する老人ホーム作りが一步ずつ前進している手ごたえをつかんだのはこのときでした。

## 7) 資金計画

「故郷の家」の建設資金は、7億3,868万円のうち、日本自転車振興会より2億1,874万円の補助金以外は、すべて募金に頼らなければならない厳しい状況におかれていました。全国的な募金活動を進め、2億5,800万円の実績をあげましたが、建設費の支払いが残っており苦しい状態でした。開設から2年後、在日コリアン高齢者の福祉に成果を上げてきた特別養護老人ホーム「故郷の家」を、地元から支援する声が高まり、南大阪の在日韓国人中心の「故郷の家後援会」が発足し、資金援助活動が始まり、1億円募金を達成させました。金重根(キム・ジュンゲン)後援会会長はじめ、多くの在日韓国人有力者が協力してくださらなければ、とても、今の故郷の家はできなかったのです。

幸い、その後の増築の折には実績がかわれ、国・大阪府・堺市の補助金をいただくことになりました。1995年の阪神淡路大震災後、神戸市長田区に「故郷の家・神戸」を建てる時も、実績を評価していただき補助金をいただきました。感謝しています。

ちなみに、社会福祉施設を整備する際、国が50%、地方自治体が25%、福祉法人は25%の負担となりますが、土地代も含めると、神戸の場合、自己資金が5億9,000万円でした。

## 3. 日韓両国の市民による在日コリアン老人ホーム「故郷の家」の誕生

### 1) 産声を上げた故郷の家

1988年9月29日、社会福祉法人こころの家族は大阪府の認可を得、翌年10月31日、日韓両国の関係者500余名が参席し、「故郷の家」の竣工式を行ないました。はじめての入所者・許李花(ホ・イア)さんを迎えた日の感激は永遠に忘れることができ

ません。高齢になって介護の必要な在日コリアンの方々が、韓国の民具、オンドルにキムチ、ハングルを話し、ふるさとの香に包まれながら、心身ともに安心して暮らせる老人ホーム、国境を越えて、みんなと一緒に暮らせるふるさと。「故郷の家」は、これまでの生活の延長線上でありたい、部屋は、施錠なし、面会時間は自由、外出も自由。あたりまえのことができる、そんなホームを目指しています。

アヒランを聞いて立ち上がり踊るハルモニ・ハラボジ。福祉は文化だと教えられました。「少しでも心豊かに過ごしていただきたい」これが、運営にたずさわるスタッフ一同の思いです。ここでの大きな問題は、韓国の生活習慣をどのように取り入れるかということです。設立初期には、韓国から来られたカトリックのシスター9名が勤務していましたが、5年ほどでプログラムも安定し、現在は韓国の社会福祉士と社会福祉専攻の研修生が担当しています。研修生にはお年寄りの話し相手にもなって頂いています。

## 2) こころの家族の理念は

子どもや高齢者の「こころの家族」となり、その福祉ニーズに応えるプログラムの開発・支援を行う。国境・民族・文化を越えて共に生きる心豊かな社会の構築に寄与し、市民による国際協力の芽を育てる福祉文化の創造を目指します。

## 3) こころの家族の目的は

- ・世界の恵まれない子どもたちや障害児(者)の健全な育成と自立を支援することによって能力と可能性を向上させ、地域の中で共に生きていくことのできる豊かな心を育てる。
- ・故国に帰りたくても帰れない在日コリアン高齢者たちに、豊かな老後を過ごしていただくための老人ホームを作る。
- ・市民の福祉の心を育て、地域社会と世界平和につないでいく。

## 4) 故郷の家の介護方針は

- ・ 沢山のお友達ができ、日本語、韓国語など自分の言葉で語り合える楽しみが増えます。
- ・ 季節ごとの行事や慰問など多彩なプログラムがあって、毎日の楽しみが増えます。
- ・ 日曜日には毎週礼拝があります。心の安心と喜び、そして、希望が溢れます。
- ・ 韓国食、日本食をご用意します。
- ・ 昼とオンドルのお部屋があります。

- ・アリランも演歌も聞こえてきます。
- ・韓国、日本両方のスタッフが毎日のご相談やお世話にあたります。

## 5) 事例

### <2つの祖国 53年ぶりの再会 ここに来てよかった>

金 在旭(キム・ジェウク)さん(67歳)は私を訪ねてきて、「両親と親戚を探してください。14歳のとき日本に来て以来、故郷に行けませんでした」と訴えた。金さんの話を聞いて、私は、金さんの故郷である韓国大田市長と放送局長に「1人の人間が故郷を恋しがっています。肉親を探してください」と協力を要請した。

両親はすでに亡くなっていたが、3人の兄弟の生存を知らせる韓国大田市長からのメッセージが届くと、それを手にした金さんは、早速、妹に電話をして、待ちに待った肉親の声を聞いた。

その後、妹さんから手紙や写真が送られてきた。ひと目会いたい気持ちを募らせながら繰り返し読む手紙は、封筒の角も便箋の折り目もボロボロになってしまった。そんな思いが通じてか、妹さんが来日した。目を合わせるなり、兄さんと察して抱き合い、涙、涙に暮れた。一緒に迎えたみんなも、もらい泣き。韓国語を忘れていたはずの金さんが、妹さんの顔を見たらスラスラと韓国語で話し、妹さんは幼い頃使った日本語で職員と話した。1週間の滞在はあっという間に過ぎ、妹さんははじめてきた日本の観光もあまりしないまま、兄さんの手の温もりと、積もる話を土産に日本を離れた。

### <数奇な運命 2人の共同告別式>

故郷の家の人気スターだった朴 武出(パク・ムチュル)さんと韓 石芳(ハン・ソクパク)さんの共同告別式が1階ホールで営まれました。お2人の告別式には特別の意味があります。無くなられた2人は家族がありながら1人ぼっちでした。朴さんと韓さんの奥さんは、北朝鮮へ行ったままだと聞いています。不幸な時代に生れ、夢の多い少年時代に日本へ渡りました。

人間的には決して褒められる2人ではありませんでした。朴さんは朝からお酒ばかり飲んで酔っ払い、看護師やおなじお年寄りをいじめたり暴力を振るったり、みんなに迷惑をかけることもありました。朴さんは、北海道の炭鉱で小指と片目を失ったにもかかわらず障害者年金が貰えず、いつもお金に困っていて飲み代も無く、寂しい暮らしをし



ていました。故郷の家のダンボールを集めて業者に渡しては、50円稼いで、日本酒をワンカップ飲むのが朴さんの唯一の楽しみでした。1996年の秋、朴さんは故郷の家のふるさと訪問団に加わって、慶尚道を訪ねました。韓国は大きな時代の変化により、朴さんの子どもころの思い出の川や村はあとかたも無く、自分の家もなく、村人に会うこともできませんでした。60年ぶりにふるさとを訪ねたのに、誰にも会えなかったのです。しかし、居酒屋のおかみさんが歓迎し祝ってくれました。

朴さんは背が高く、美男子で、私が故郷の家の菅原文太と名づけると、喜んでくれました。異国での生活60年。数奇な運命に翻弄されたこのお2人の一生は、多くのことを私たちに考えさせます。

### <可愛い天使は希望です 日流・韓流・世代間交流>

3年前、故郷の家の施設長をしていた妻が、NHKの課外授業「ようこそ先輩」に出た。母校の小学生に、福祉の心を考えさせ、「キムチと梅干しのあるホーム」故郷の家を紹介する番組だ。2つの祖国を持つ在日コリアン高齢者に、何かをしてほしい。「自分に何ができるでしょうか」というこの宿題に、一生懸命取り組む子供たちは素晴らしかった。その心が故郷の家のお年寄りに伝わり、いい感じになった。テレビをとおして、元気な親の姿を見たご家族から「よかったです」と電話が入る。近くの小学校などからも、話にきて欲しい、故郷の家を訪ねて交流したいと申し込みが来た。核家族化が進み、子供たちが日常生活のなかで高齢者と触れ合う機会は益々少なくなっている。

韓国は儒教の国で、お年寄りを大切にする敬老思想がある。最近では、世界の情報がバリアフリーになって、韓国にも少し変化が見られる。それでも、敬老思想は厳然とある。故郷の家では、これまで、韓国の福祉を学ぶ学生や現場関係者を招き研修を重ねてきた。近いようでも知らないお互いの福祉事情。この研修では、日本の福祉制度やしくみを知ってもらい、これからの韓国の福祉に役立てて貰おうと考えている。そして、研修生たちには故国を離れて暮らしている在日コリアン高齢者の話し相手になって、ふるさとの今を、新しい風を届けてもらっている。他にも、民族学校の子どもたちが歌や踊りを練習して慰問に来てくれたり、地域の日本の保育園の幼児たちが開設以来、毎年ミニ運動会を続けてくれている。

お年寄りの手は、柔らかい。「かわいいね。今日はありがとうね」と優しく語りかけるお年寄りの大きな手の温もりに、子供たちの緊張や戸惑いも薄らぎ、お年寄りを自然に受け入れていくようです。おみやげは、ひとことハングル講座。日韓ワールドカップ開催以来、冬のソナタで、今、韓流が話題になっているが、故郷の家では、かわいい天

使の日流と韓流が人気なのです。

#### 4. 在日コリアン老人ホーム「故郷の家」と「故郷の家・神戸」だけで十分なのか

在日韓国老人ホーム「故郷の家」は、在日コリアン高齢者福祉のスタートに過ぎません。地域の福祉需要により、全国への拡散が必要です。

##### 1) 最近の在日コリアンの傾向 (2003年12月現在)

・在日外国人	190 万人
・在日韓国・朝鮮人	63 万人
・在日韓国・朝鮮高齢者	約9 万人
・在日韓国・朝鮮高齢者無年金者	約6 万人
・在日韓国・朝鮮人の結婚	85%が日本人と結婚
・在日韓国・朝鮮人の帰化	約1 万人

##### 2) 必要とされている建設地域と在日コリアンの登録数

東京	100,870 人
横浜	32,201 人
名古屋	50,180 人
京都	43,522 人
大阪	166,232 人
広島	14,445 人
福岡	23,485 人

#### 5. 在日コリアン老人ホーム「故郷の家」の事業の概要

##### 1) 沿革

1982.3	韓国共生福祉財団東京事務所を開設	こころの家族の運動実施
1984.6	社会福祉事業家 尹 基が在日韓国人老人ホームの建設を提唱	
1985.2	日本の福祉界、教育界、宗教界、政界、経済界、文化界、社会団体の代表500名の発起人で、在日韓国人老人ホームを作る会を発足	

- 1987.7 大阪事務所開設
- 1988.9 社会福祉法人「こころの家族」認可
- 1989.10 「故郷の家」竣工「故郷の家」,「故郷の家診療所」開設
- 1994.6 大阪市生野区「故郷の家」介護サポートセンター開設
- 1996.4 「故郷の家」増築
- 2001.2 神戸市長田区に「故郷の家・神戸」新築
- 2001.3 神戸市長田区にある真野サービスセンター, 高齢者住宅管理委託

## 2) 事業内容およびサービス地域と定員

地域定員 事業名	堺地域	大阪地域	神戸地域	計
特別養護老人ホーム	80名	0	58名	138名
ショートステイ	10名	0	12名	22名
デイサービスセンター	20名	30名	30名	80名
ヘルパー派遣事業	30名	30名	30名	90名
在宅福祉支援事業	相談事業	相談事業	0	0
ホームヘルパー2級養成講座	70名	0	70名	140名
計	210名	60名	200名	470名

## 6. 在日コリアン老人ホーム「故郷の家」の活動

### ◆ 故郷（福祉施設）づくり

- (1) 第1次計画（1985年～1989年） 故郷の家 定員55名（特別養護老人ホーム）
- (2) 第2次計画（1992年～1993年） 故郷の家デイサービスセンター  
（デイサービスセンター）
- (3) 第3次計画（1994年～1995年） 故郷の家 増築 定員80名  
（特別養護老人ホーム）
- (4) 第4次計画（1996年～2001年） 故郷の家・神戸 定員58名（ 〃 ）
- (5) 第5次計画（2003年～2005年） 故郷の家・練馬 定員70名（ 〃 ）

### ◆ 福祉文化づくり

#### (1) 福祉図書出版

- ・ 「母よ、そしてわが子らへ」 (尹 基著・1993)
- ・ 「風が通る道」 (尹 基著・中央法規・2001)
- ・ 「羊がいつびき」 (田内文枝著・クリスチャン新聞)

・ 「故郷の家の人々」

(故郷の家 10 周年 記念誌)

## (2) 映画製作

### ・ 製作趣旨

- ①日韓の不幸な歴史の中においても、痛みを癒す愛こそが和解と親善をもたらす。
- ②植民地時代から現在まで、国境を越えた愛を実践した田内千鶴子と子供たちを描き、多くの人々に希望と勇気を与える。
- ③日韓の正しい歴史を考え、共に生きる心を広げる。

### ・ 映画の成果

<表彰>

1996 年 日本厚生大臣賞 (児童福祉文学賞)

1997 年 山路文子賞 (福祉賞)

1998 年 日本カトリック映画賞

1998 年 日本映画韓国上映許可第 1 号作品

1999 年 日本映画批評家アジア親善作品賞

<上映>

日本全国 700 箇所以上で上映され、福祉の原点を啓蒙

## (3) 国際社会福祉セミナー

日韓両国の福祉関係者、官・学・民が集い、意見交換をし、交流する目的で、1987 年 10 月に第 1 回国際社会福祉セミナーを済州島で開催して以来、これまでに 9 回開催しました。

## ◆ 福祉人材づくり

### (1) ホームヘルパー2 級養成 (堺・神戸)

2000 年から開始し、現在までに 253 名が修了しました。

### (2) 国際社会福祉研修

韓国の福祉関係者 (公務員, 教授, 学生, 福祉施設従事者, 教会) を対象に日本の福祉を正しく理解し、相互交流を図ることを目的とし、日本の各行政、教育、施設などの見学と講義を中心に、1992 年から現在まで 43 期 614 名が研修を修了しました。

- (3) 「故郷の家」職員研修
- ・勉強会 (毎月1回)
  - ・韓国福祉現場研修 (年1回)
  - ・国内研修 職員1人1回 参加目標

#### ◆福祉市民づくり

(1) 日韓こころの交流講座

- 第1回 大阪国際会議場 (2003. 11)  
「晩婚・日韓比較 独身時代を生きる」— 講師 卞 化順
- 第2回 大阪国際会議場 (2003. 12)  
「子供への虐待 国際比較」— 講師 金 聖二
- 第3回 大阪国際会議場 (2004. 1)  
「老後の日韓比較」— 講師 朴 在侃
- 第4回 大阪国際会議場 (2004. 2)  
「新しい時代に新しい子育てを」— 講師 大日向 雅美
- 第5回 大阪国際会議場 (2004. 3)  
「これからの家族」— 講師 樋口恵子
- 第6回 特別養護老人ホーム故郷の家 (2004. 4)  
「キムチは家庭の味 (キムチ講習)」— 講師 金 裕美

(2) “日韓こころの交流” シンポジウム

- 第1回 韓国 済州島ラマダプラザ済州ホテル (2003. 12)  
「ソーシャルワーカーの専門性の開発と将来展望」
- 第2回 日本 リーガロイヤルホテル大阪 (2004. 12)  
「高齢福祉施設におけるソーシャルワーカーの位置と役割  
—地域社会の視点から—」

## 7. 在日コリアン高齢者福祉の課題

### 1) 無年金者問題

2004年5月30日に発足した「在日コリアン高齢者生活支援ネットワーク・ハナ」によって、現在625,000人の韓国・朝鮮人のうちの13%、約81,000人が65歳以上の高齢者であるという調査発表がありました。

その中で推定約6万人が無年金者として放置されているといえます。強制的に祖国を離れ、終戦後もやむを得ず異郷にとどまるしかなかった在日のハラボジ、ハルモニ、アボジ、オモニたちは日本による朝鮮植民地支配の犠牲者でした。

戦後の日本社会は、今まで住民として日本で暮らしてきた在日コリアンに対して戦前と変わりなく、差別と同化政策をとってきました。在日コリアンは在留資格を含んだ法的地位、社会保障、教育制度、就業等、多様な面において、権利が閉ざされています。国民年金制度で国籍条項が撤廃され、国民年金に加入できるようになったのは、戦後37年後の1982年からでした。しかし、その時すでに高齢になっていた在日コリアンは救済措置がとられないまま、無年金状態におかれましました。

## 2) 在日コリアンを視野に入れた介護サービス運営の必要性

2000年4月から導入された介護保険制度も、生活習慣や文化が違う在日コリアンを視野に入れずに始められました。無年金の高齢者にとっては、この制度は負担でしかありません。在日コリアン高齢者にとって、日本人のために準備された介護保険サービスは、生活文化、慣習などが違うため、介護保険料を払っても、サービスを利用するのが難しい状態です。このような不条理な実態を改善すべく在日2,3世が在日コリアン高齢者の生活支援のため、生活実態およびコリアンの特性を配慮した社会福祉サービスを展開し始めました。これは喜ばしいことでもあります。

3) そのほかにも在日コリアンのための福祉施設の整備、在日コリアンのための社会福祉士・ケアマネージャー・介護福祉士養成、在日コリアンのためのガイドブック開発、大学院、学部課程における異文化・多文化福祉体験が必要です。

## 8. 新しい発見 民団は地域の福祉館 在日の福祉ネットワークづくり

### 1) 地域福祉推進

厚生労働省社会援護局長の真野章氏は、「今日、日本は、少子高齢化の到来と共に、地域社会の変容などにより高齢者、障害者などの生活上の支援を要する人々は、一層厳しい状況に置かれている。(中略)住民生活の安心と安定を実現するためには、人々の生活の拠点である地域に根ざし、相互に助け合うと共に、それぞれの地域で誰もが、その人らしく安心して、充実した生活が送れるような地域社会を実現し、地域社会を基盤とした福祉、即ち、『地域福祉』を推進することが極めて重要になっている」と語っています。

## 2) 厚生省の社会的援護を要する人々のための新しい社会福祉検討会

2000年12月に、私も委員として参加し、当時の厚生省が取りまとめた「社会的な援護を要する人々に対する福祉のあり方に関する検討会」の報告においても「地域社会における『つながり』の再構築」が大きなテーマでした。

「つながり」を考える時、日本人が気づかない大切な団体があります。それは、在日本大韓民国民団で、傘下に47の地方本部と、300を越える各支部の会館があります。地方自治体の補助もないまま、在日韓国人1世たちの血と汗と涙で作りに上げた会館は、在日韓国人だけでなく、地域社会の大切な資源であり、宝です。ここでの働きについても検討が始まっています。それは、①日本と韓国との情勢の変化、②団員の構成の変化、1世から2世、3世、4世になり、結婚も85%が日本人としていること。③団員の価値観の変化や新しい活動についての要請。④少子・高齢社会を迎え、地域福祉計画の策定が行われています。⑤世界的に多文化共生時代を迎え、コリアジャパンコミュニティセンターのようなモデルが時代的に求められているからです。

2002年2月、大阪府地域福祉支援計画検討会へも出席し、次のように提言しました。

### ◆大阪府地域福祉への提言

- (1) 現在、民生委員・児童委員は特別公務員ということで、在日外国人は参加できない。大阪府では地域の特色をかんがみ、府独自で特別に民生委員として参加できる道を開く。
- (2) 欧米諸国では、教会の牧師に地域のユースリーダーの資格を与えて、地域の資源として活用している。大阪府においても、在日外国人の弁護士・医師・教師・看護婦・ソーシャルワーカー・牧師・住職・在日外国団体の事務局長（大阪府下韓国民団36支部ある）などを外国人相談員として生かし、大阪府民としての誇りを持てるようにすること。
- (3) 地域福祉づくりの一環として、韓国民団・朝鮮総連の各支部にデイサービスやグループホームなどの仕事を委託
- (4) 外国人専門のソーシャルワーカーを育成
- (5) 大阪府外国人総合福祉サービスセンターの創設
- (6) その他

### 3) 在日韓国人の福祉プログラム懇談会開催

2002年5月には、故郷の家で、韓国から社会福祉の専門家らを招き、民団幹部と共に在日コリアンの福祉と地域社会の共生を考える「在日韓国人福祉プログラム懇談会」を開催しました。(具文浩(民団中央本部副団長), 金基周(民団大阪本部元監察委員長), 鄭鎬榮(民団堺支部支団長), 呉時宗(民団堺支部副支団長), 鄭鉉泰(民団堺支部元支団長), 金泳鎬(韓国江南大学社会福祉学科教授), 李鐘海(仁川永樂院院長), 朴商信(韓国社会福祉館協会会長), 崔聖均(韓国社会福祉士協会会長), 高橋重宏(日本社会福祉事業大学教授), 小橋弘子(ボランティア音楽セラピスト), 田内文枝(特別養護老人ホーム「故郷の家」総合施設長), 尹基(社会福祉法人こころの家族理事長)らが参加)

その結果、この年の6月、韓国社会福祉士協会は、韓国保健福祉部長官に海外同胞3万人に1人の社会福祉士を担当官として派遣し、海外同胞の福祉問題を専門に担当するよう建議しました。韓国の福祉館は、その数600を越え、専門ソーシャルワーカーたちの働きによって発展しました。最近では日本の社会福祉関係者も注目しています。市町村は地域福祉計画策定を進めていますが、外国人も地域住民の1人として受け入れる、自由と平和と愛がある社会の実現を期待します。なぜなら、在日外国人の幸せは、日本人の幸せだと信じるからです。

## 9. 今後望まれる在日コリアン共同体の新しい機能と役割

### 1) コリアジャパンコミュニティセンターの事業内容

- (1) 地域福祉事業
- (2) 相談事業
- (3) 在宅福祉事業 (ホームケアサービス&デイケアサービス)
- (4) 社会 (母国語含む) 及び文化教育事業
- (5) 敬老会活性化と老人福祉事業の後援活動
- (6) 青少年健全育成のための支援事業
- (7) ボランティアの養成と組織化事業
- (8) 調査・研究事業
- (9) 国際交流事業
- (10) 体育 (レクリエーション含む) 振興事業
- (11) 人権と権益を涵養する討論の広場



(12) その他

## 2) 事業の効果

- (1) サービスがある共同体
- (2) 地域社会に奉仕する共同体
- (3) 自立する共同体
- (4) 雇用創出する共同体
- (5) 国際交流と国際協力を促進する共同体
- (6) 人材育成する共同体
- (7) 経営の専門化を図る共同体

在日コリアン共同体は人的、物的、知的資源を総動員して、将来においても躍動的な組織体として、新しくそして効率的に推進するためには、社会福祉士の派遣もしくは地域社会福祉士（コミュニティソーシャルワーカー）の養成が必要となります。

## 10. ひとりのソーシャルワーカーとして

大阪、神戸、東京地域で20年間社会事業家として仕事をしながら、次のようなことを感じました。日本で生活している韓国語を母国語とする在日コリアンにとって、現行の社会福祉サービスを利用するには、言語文化などに大きな壁があり、非常に難しいということでした。

特に社会福祉を実施している福祉事務所や社会福祉協議会、社会福祉施設や機関が、在日外国人に必要なサービスを提供しようとする動きがありません。適当な人材がいなかったり、予算が限定されていることがその原因ですが、独創的なサービスを計画し、在日外国人に援助の手を差し伸べる姿勢がないことが根本的な理由であるといえます。

在日外国人の中でも、多くの割合を占める在日コリアンは、外見が似ていて、生活習慣や文化も、仏教や儒教の精神という点で似ており、また文化という概念の意味をはっきり認識するのが難しいため、文化の問題を社会福祉の実践と結びつけて考えることがほとんどなかったからです。

## 在日外国人は日本社会にプラスになる

- (1) 在日外国人をめぐる課題の前提は、外国人の存在によって、地域が多様化され、

多文化共生を推進させるということを認識する必要があります。

- (2) 福祉の目的は、自立と独立、自己決定がなされ、自由になることであり、自己実現を達成することです。地域福祉はこのような目標のための環境をつくっていくことが重要です。
- (3) 在日外国人の健全なコミュニティを形成することによって、外国人個人、家庭、組織、ネットワークなどの力量を高め、日本社会において有用な人材として貢献することが出来ます。
- (4) 福祉サービスはヒューマンサービスであり、そのサービスの対象は人間です。人間の健全な自己実現は、その人の文化的基盤の上で達成されます。その人のライフスタイルとアイデンティティも、その人が持っている特有な文化によって形成されます。
- (5) マイノリティに対する福祉サービスは、マイノリティ文化を基礎として、個人のアイデンティティを形成することから始まります。そのアイデンティティ形成に重要な環境は家族とマイノリティコミュニティです。
- (6) 健全なアイデンティティの形成は、健全な生産的人間を作ることが基本です。
- (7) 欧米において、社会福祉システムの基本は家庭中心であり、地域を基盤とする地域福祉です。この地域福祉は住民主体を原則に、地域自らがいろいろな問題を解決する能力、力量をもっています。

## ソーシャルインクルージョン社会を目指して

社会構造が大きく変動する中で、社会から疎外、排除されてきた人たちを抱擁するソーシャル・インクルージョンという概念が注目を集めています。これは、精神、知的、身体に障害のある人、高齢者や子供、失業や貧困、薬物依存といった問題を抱える人、セクシャル・マイノリティ、定住外国人などが、共に生きる豊かな社会をつくっていく新しい取り組みです。

グローバルゼーションのもとで、急速に進む都市化、市場化、情報化は、人間と人間のつながりを断ち切り、人間と人間の格差を広げています。このような中で、分断や格差を生み出す構造を解消し、すべての人が平等に社会に受け入れられるようにするために生まれてきたのが「ソーシャル・インクルージョン」という概念です。近年、フランスやイギリスを始めとしたヨーロッパの国々において、公共政策を進める上でのキーワードとなっています。

日本はもともと「同じ」であることへの固執、優劣へのこだわり、経済優先への過熱

などの偏りが強く、その歪みがいたるところに表れ、生きにくい社会となっています。これまでの、社会から疎外・排除されてきた人々だけの問題ではなく、不況によるリストラ、いじめや引きこもりなどの新たな問題も生じる中で、あらためてソーシャル・インクルージョンをキーワードに住みよい社会をつくっていくことが求められます。

そこで「故郷の家」では、「違い」と「違い」をつなぎ、文化の力を生かし、人間的なつながりのある、多様な社会を目指すことが重要だと考えています。文化は一人ひとりの存在の違いを際立たせるとともに、人と人をつなぐ力もあるからです。

地域社会の中にいながら、地域社会の中に入れてもらえなかった人たちが、地域社会の中に入っていくという新しい福祉文化を、ともに考えていく必要があります。

## プロフィール

尹 基 (ユン・キ)

日本 社会福祉法人こころの家族 理事長

### 経歴

1942年 10月 韓国木浦市 生まれ  
1962年 2月 韓国 中央神学校・社会事業学 卒業  
1968年 11月 韓国 社会福祉法人 木浦共生園 園長 就任  
1978年 5月 韓国 社会福祉法人 共生福祉財団 理事長 就任  
1979年 7月 韓国 社会福祉法人 共生福祉財団 会長 就任  
7月 韓国基督教社会福祉学会 常務理事  
1983年 4月 韓国 社会福祉法人恩平天使園 理事 就任 ～ 現在  
1987年 社団法人 韓国社会福祉士協会 副会長、会長 歴任 ～ 1991年  
1988年 10月 日本 社会福祉法人こころの家族 理事長 就任 ～ 現在  
1995年 10月 日本 映画”愛の黙示録”を世界に送る会代表  
2000年 7月 日本”厚生省社会局社会福祉のあり方に関する検討会”委員歴任  
2001年 4月 韓国 社会福祉法人 共生福祉財団 名誉会長 就任  
2003年 在日韓国民団福祉推進委員  
2004年 3月 日本ソーシャル・インクルージョン研究会運営委員  
2004年 6月 在日コリアン高齢者生活支援ネットワーク・ハナ共同代表

### 賞

1978年 2月 韓国 第22回小波賞 受賞  
1979年 5月 韓国 ソウル特別市感謝状 受賞  
1979年 6月 大韓民国政府より、国民褒賞  
1992年 5月 韓国 江南大学校総長 功労牌 受賞  
1996年 3月 日本 大阪商工会議所”Friendly大阪大賞”準大賞 受賞  
1997年 10月 韓国福祉新聞社より、世界平和福祉人物賞 受賞  
1998年 8月 駐大阪大韓民国総領事より、感謝状  
2000年 5月 日本 大阪府知事、表彰  
2000年 10月 日本 毎日新聞社”毎日社会福祉賞”受賞  
2001年 5月 韓国 保健福祉部長官 表彰  
10月 日本財団 社会貢献支援財団”社会貢献賞”受賞  
2002年 3月 国際交流基金”地域交流振興賞”受賞

### 著書

「母よそして我が子らへ」(愛の黙示録原作 韓国語版は「オモニヌン パボヤ」)  
「風の通る道」(韓国語版は「キムチとウメボシ」:イェジ出版)  
「変人小泉総理ゆれる日本」(翻訳・イェジ出版)  
「金大中 生産的福祉の道」(翻訳・毎日新聞社)

# 재일코리언을 위한 특별양호노인홈 “고향의 집” 활동보고

— 한 사람의 소셜워커로서 —



윤 기  
일본 사회복지법인 마음의 가족  
이사장

## 1. 재일코리언 노인홈 “고향의 집” 은 시민에 의해 만들어졌다.

재일코리언 고령자복지의 필요에 대한 시민의 강한 지지

- 1) 일한역사의 희생자라는 역사인식
- 2) 속죄하는 크리스찬의 마음
- 3) 한국에 대한 우정·우애를 느끼는 시민·문화인
- 4) 과거, 한국인에게 도움을 받은 사람들
- 5) 문화를 존중하는 복지가 필요하다는 복지전문가의 협력
- 6) 재일한국인의 기대
- 7) 메스컴의 적극적인 보도·협력

## 2. 재일코리언 노인홈 “고향의 집” 은 어떻게 만들어 졌는가

### 1) 재일동포의 고독사 - 문제의 발견

한일국교 정상화 체결에서 19 년째의 1983 년 3 월에 나고야 근처에서 재일 코리언 고령자 2 사람의 고독한 죽음이 있었다. 한 사람은 사망한지 13 일 만에 발견되었고, 또 한 사람은 화재로 병원에 입원하여 돌아가셨으나 시신을 인수할 사람이 없었다라는 슬픈이야기였다. 이 두 사건은 재일코리언 사회에 큰 충격을 안겨 주었으며 고령사회에 불안을 던졌다.

## 2) 문제를 사회에 알리다 - 논단투고·운동제창 -

이 투고는 전국에 큰 파문을 일으켰다. 주한 일본대사였던 가나야마(金山政英)씨를 비롯하여 배우인 스가하라다 분타(菅原文太)씨 그리고 크리스찬들 사이로 공감대가 확대되었다.

“급속한 템포로 고령사회에 돌입하고 있는 일본에서 잊어서는 안되는 것이 재일코리언 고령자 문제이다. 일본의 전시정책에 의해서 일본에 오게된 재일코리언들은 이미 고령화되어 70세 이상의 수가 만명을 넘고 있다. 그 중에 1,400 명이 경제적, 가정적으로 어려워 노인홈 입소를 긴급히 필요로 하고 있다. 70세 이상의 수와 노인홈 입소 희망자의 수는 재일코리언이 70만명이라 생각할 때 문제가 되는 것은 자명하다.

생활보조비의 지급, 노인홈에의 입소 등 일본의 복지의 손길은 재일코리언에게도 차별없이 제공되고 있다. 그러나, 재일코리언 고령자 대책은 이것으로 충분한것인가. 오랜 역사속에서 웅어리와 생활양식의 다른점 등 많은 재일코리언들은 노인홈에 들어가려 하지 않는다. 생활습관이 다르기 때문이다.

조선 총독부관리의 딸이었던 필자의 어머니는 7세때부터 한국에서 자랐다. 26세때 목포에서 고아를 위해 작은 시설을 만들어 헌신하고 있는 한국인 전도사 윤치호와 결혼했다. 한국동난으로 남편이 행방불명이 된 후에도 고아들과 함께 한국에서 살 것을 결심한 어머니는 한국말을 사용하고 김치를 먹으며 언제나 치마저고리를 입었다. 50년을 한국에서 생활하고 고아들의 어머니로 존경받았던 어머니는 한국인이 되어 있었다. 그런데, 병마에 쓰러져 의식이 희미해 졌을 때 필자에게 한말은 일본어로 ‘우메보시가 타베다이’ 였다.

재일코리언의 고령자 문제를 생각할 때에 그날 그때의 어머니처럼 재일코리언 1세의 할아버지 할머니들은 한국어로 ‘김치가 먹고 싶다’ 고 하시지 않을까.

한국의 고도 경주에는 고독한 일본인 부인들을 위한 노인홈이 있다. 이 노인홈에서 사용하고 있는 말은 일본어이다. 각 방에서 일본 노래가 들려오고 벽에는 후지산의 사진이 걸려있다. 그리고 식탁에는 닥광와 우메보시가 나온다. 한국 복지의 보호아래 자유로운 생활을 하면서 천수를 기다리는 일본인 고령자들의 모습이 있다.

고향에 돌아가고 싶어도 돌아갈 수 없는 재일코리언의 고령자들이 오손도손 한국말을 하며 노후를 안심하고 보낼 수 있는 재일코리언 전용의 노인홈 건설이 절실히 필요하다” (1984년 6월 18일자 아사히신문 논단).

### 3) 관심있는 사람을 모으다

공감대가 운동으로 확산된 것은 같은 해, 동경에서 열린 “어머니여 그리고 자식들이여” (윤기蓊, 나중에 ‘사랑의 묵시록’ 으로 영화화 함)의 출판기념회의 일이다. 그 자리에서 “재일한국노인홈의 건설” 을 호소하자, 출석자 전원의 찬동을 얻었다. 당시, 오차노미즈에 있던 “공생복지재단 동경사무소” 에 “재일한국노인홈을 만드는회” 의 조직 준비가 진행되었다.

### 4) 모인사람들 중심으로 조직화

시민운동의 조직 만들기의 계기가 시작된 것은 1984 년 12 월. 출판기념회 출석자의 명단을 기초로 “재일한국노인홈을 만드는회” 추천인 32 명의 찬동을 얻어 사회각계 지도인사 3000 명에게 발기를 요청하는 문서를 전국에 발송하였다.

### 5) 모임에서 실천의 방법을 논하다

1985 년 2 월, “재일한국노인홈을 만드는회” 가 정식으로 발족하였다. 지금까지 추천인으로서 활동을 계속해왔던 32 명과 발기인 500 여명으로 재일한국노인홈을 만드는 회 운동을 본격적으로 시작하였다.

#### ● 캐치프레이즈

“누구든지 고향이 필요하다”

“우리의 손으로 한국조선인 노인홈을 만들자”

“1 만엔을 기부하는 사람이 3 만명 있다면 노인홈은 건설된다.

당신도 3 만명의 1 명이 되어 주세요”

#### ● 모금의 방법 :회원제

일반회원 :1 구좌	1000 엔
찬조회원 :1 구좌	10,000 엔
한평회원 :1 구좌	350,000 엔(堺), 450,000 엔(神戸)
유지회원 :1 구좌	1,000,000 엔
명예회원 :1 구좌	10,000,000 엔

### 6) 모금은 시민참가형으로

건설부지가 오사카 사카이시(大阪堺市)로 결정된 것은 1987 년 7 월 4 일, 오

사카부사회복지지도센터내에 “재일한국노인홈을 만드는회 오사카사무소”가 개설되었다. 9월 7일, 同·오사카실행위원회가 열려, 위원장에 하라다겐(原田憲)중의원 의원이 취임하였다. 여기서 노인홈을 “고향의 집”으로 하는 것과 운영모체로서 “사회복지법인 마음의 가족”을 설립하는 것을 발표하였다.

모금활동에 참가하는 회원으로부터 다음과 같은 편지가 있었다. 익명을 요구하는 여성이었다.

“지난번의 팸플렛 등, 여러가지로 보내주셔서 감사합니다. 저는 반신불수의 남편과 살고 있지만, 남편은 옛날부터 몸이 약하고 움직이지 못하여 어려움을 겪었습니다. 무엇하나 자랑거리는 없지만, 고생만큼은 자랑할 수 있습니다. 그것도 보통의 고생과는 좀 다릅니다. 저는 돈도 없습니다. 부끄러운 일입니다. 자식들도 월세를 내느라고 큰일입니다. 제가 말하고 싶은 것은 어쨌든 노인홈을 만드는 것에 대해 대단히 기쁩니다. 그러나 응원할 수 없는 것이 무척 안타깝습니다. 저의 마음입니다. 학교라고는 2년 정도 밖에 다니지 않아서 편지가 읽기어려우리라고 생각합니다만, 잘 보이주십시오. 어쨌든 열심히 해주세요. 실현, 실행되길 기도합니다. 기도합니다. 감사합니다.”

사무국에서는 이 편지에 감동하여 몇 번이고 다시 읽었다. 이렇게 자신의 일처럼 기뻐하고, 기도해 주는 사람이 있었다. 많은 시민이 참가하는 노인홈 만들기가 한발 씩 전진해 나가고 있다는 반응을 느낄 수 있었던 것은 바로 이것이었다.

## 7) 자금계획

“고향의 집”의 건설자금은 7억 3,868만엔 속에, 일본 자전거진흥회로부터 2억 1,874만엔의 보조금 이외에 모두 모금으로 충당하지 않으면 안되는 어려운 상황에 놓여있었다. 전국적인 모금활동을 진행하여 2억 5,800만엔의 실적을 올렸지만, 건설비의 지불이 남아있어 어려운 상황이었다. 개설로부터 2년 후, 재일코리언 고령자의 복지에 성과를 올려온 특별양호노인홈 “고향의 집”을, 지역에서 지원하고자하는 소리가 높아져, 재일한국인을 중심으로 “고향의 집 후원회”가 발족하여, 1억엔 모금을 달성하였다. 김종곤 후원회 회장을 비롯하여 많은 재일한국인 유력자가 협력해 주지 않았더라면, 현재의 고향의 집은 완성되지 못했을 것이다.

그 후 중축할 때는 실적을 인정받아 국가·오사카(大阪)·사카이시(堺市)의



보조금을 받을 수 있었다. 1995 년의 한신대지진 이후, 고베시 나가타구(神戸市長田区)에 “고향의집·고베” 를 건설할 때는 고향의 집의 활동이 평가되어 보조금을 받을 수 있었다. 참고로 일본에서 복지시설을 정비할 때 정부 50%, 지방 25%, 법인 25% 이나 토지구입비를 포함하면 법인부담은 고베의 경우 5 억 9 천만엔이었다.

### 3. 한일양국의 시민에 의한 재일코리언 노인홈 “고향의 집” 의 탄생

#### 1) “고향의 집” 의 탄생

1988년 9월 29일, 사회복지법인 마음의 가족은 오사카부의 인가를 취득하여, 다음해 10월 31일, “고향의 집” 은 한일복지관계자 500여명의 참석하에 준공식을 갖었다. 첫 입소자 허이화씨를 맞이했던 날은 감격하여 영원히 잊을 수 없다. 고령으로 개호를 필요로하는 재일코리언들이 고향의 향기속에서 몸과 마음이 편안하고 안심하고 생활할 수 있는 노인홈, 국경을 넘어, 모두가 함께사는 고향. “고향의 집” 은 지금까지의 생활의 연장선상으로 면회시간은 자유, 외출도 자유, 당연한 것이 가능한 그런 홈을 목표로 정했다.

휠체어에 앉아 계시는 할머니가 아리랑을 듣고 일어나서 춤을 추시는 것을 보고 “복지는 문화다” 라는 것을 실감할 수 있었다.

“조금이라도 마음 편히 생활할 수 있도록” 하는 것이 직원의 목표다. 가장 큰 문제는 한국의 생활습관을 어떻게 반영하느냐는 것이었다. 설립초기에는 한국에서 수녀 9분이 왔으나 5년간 프로그램이 안정되어 현재는 한국의 사회복지사와 사회복지 전공 연수생이 맡고 있다. 고령자의 말벗이 되어 드리고 외출, 레크레이션 등 다양한 프로그램을 담당하고 있다.

#### 2) “마음의 가족” 의 이념

아동 및 고령자들의 “마음의 가족” 이 되어, 복지니드에 맞는 프로그램을 개발하여 지원한다. 국경·민족·문화를 넘어 더불어 살아가는 풍요로운 마음의 복지사회 구축에 기여하며 시민참여에 의한 국제협력의 싹을 키우는 복지문화 창조를 목표로 한다.

#### 3) “마음의 가족” 의 목적

- 소외되고 어려운 환경에 처한 아동, 장애인(아)의 건전한 육성과 자립을 지원하므로 그들의 능력과 가능성을 향상시켜, 지역사회에서 함께 살아가는 마음

을 키운다.

- 고국에 돌아가고 싶어도 돌아갈 수 없는 재일코리언 고령자를 위해 풍요한 노후를 보낼 수 있는 노인홈을 만든다.
- 시민의 복지의 마음을 키워 지역사회와 세계평화에 기여한다.

#### 4) “고향의 집” 의 개호방침

- 같은 처지의 친구들이 있어 일본어, 한국어 등 모국어로 말할 수 있는 즐거움이 늘어난다.
- 계절별 행사, 위문 등 다채로운 프로그램이 있어, 매일의 즐거움이 늘어난다.
- 일요일에는 예배가 있다. 마음의 안심과 기쁨, 그리고 희망이 넘친다.
- 한국식, 일본식 메뉴를 준비한다.
- 다다미와 온돌방이 있다.
- 아리랑, 엔가를 들을 수 있다.
- 한국, 일본 양국의 스텝이 매일 상담과 함께 도와드리고 있다.
- 고향방문

#### 5) 사 례

##### <두개의 조국 - 53 년만의 재회, 이곳에 와서 좋았다>

김재욱씨가 나를 찾아와 고향에 가고 싶다고, 부모친척들을 찾아달라고 호소했다. 14 세 때 일본에 온 이래 고향에 가지 못했다고 했다. 나는 김재욱씨의 고향인 대전시장과 방송국장에게 호소했다.

여기 한 인간이 고향소식을 그리워하고 있다고, 기적과 같이, 부모는 이미 돌아가셨으나 3 형제의 생존을 알리는 한국 대전시장으로부터의 메시지를 받은 김씨는 곧바로 여동생에게 전화를 걸어 기다리고 기다렸던 육친의 목소리를 들었다. 그 후 여동생으로부터 편지나 사진등이 보내져 왔다. 한 번이라도 만나고 싶은 마음은 더해지고 되풀이하여 읽은 편지는 봉투며, 편지의 접은 금도 헤어져버렸다. 그런 마음이 통한 것인지 여동생이 일본에 왔다. 얼굴을 보자마자 오빠를 알아보고 껴안고 눈물을 흘렸다. 함께 마중나온 모두가 따라 울었다.

한국어를 잊고 있었던 김씨가 여동생 얼굴을 보면 술술 한국어로 말하고 여동생은 어린 시절에 사용했던 일본어로 직원과 말했다. 1 주일간의 체재는 어느새 지나가고 여동생은 처음으로 온 일본 관광도 제대로 하지못한 채 오빠의 손의 따스함과 쌓인 이야기를 선물로 일본을 떠났다.

## <기구한 운명 - 2명의 공동고별식>

고향의 집 인기스타였던 박 무출(朴武出)씨와 한석방(韓石芳)씨의 공동고별식이 1 층홀에서 거행되었다. 두 사람의 고별식에는 특별한 의미가 있다. 돌아가신 두 사람은 가족이 있으면서도 혼자였다. 박씨와 한씨의 부인은 이북에 간 채라고 듣고 있다. 불행한 시대에 태어나 꿈 많은 소년시대에 일본으로 건너 왔다.

인간적으로는 결코 칭찬할 만한 두 사람은 아니었다. 박씨는 아침부터 약주만 마시고 술에 취하여 간호사나 같은 어르신을 구박하고 폭력을 휘둘러 다른 사람들에게 폐를 끼치는 일들도 있었다. 박씨는 홋카이도(北海道)의 탄광에서 새끼손가락과 한쪽눈을 잃었는데도 불구하고 장해자연금을 받지 못하고 늘 돈이 없으며, 술마실 돈도 없이 외로운 생활을 하고 있었다.

고향의 집의 빈 박스를 모아 업자에 넘겨 50 엔을 벌어 일본술을 한 컵 마시는 것이 박씨의 유일한 즐거움이었다. 1996년 가을, 박씨는 고향의 집 고향방문단에 참가하여 경상도를 방문했다. 한국은 큰 시대 변화에 의해 박씨의 어린 시절 추억의 개천이나 마을은 흔적없이 살아져 자기 집도 없고 마을 사람들과 만날 수도 없었다. 60년만에 고향을 찾았는데 아무도 만나지 못했다. 그러나 대포집 아줌마가 환영하여 축하 해 주었다.

박씨는 키가 크고 미남이며 내가 고향의 집의 폴 뉴먼이라고 이름 붙이면 기뻐 해 주었다. 이국에서의 생활 60년. 지구한 운명의 이 두사람의 일생은 많은 것을 우리들에게 생각하게 한다.

### 4. 재일코리언 노인홈 “고향의집” 과 “고향의집 · 고베” 만으로 충분한가

재일한국인노인홈 “고향의집” 은 재일코리언 고령자복지의 출발이며, 지역복지 수요에 의한 전국에 확산이 필요하다.

#### 1) 최근 재일코리언의 경향 (2003년 12월현재)

○재일외국인	190 만인
○재일한국 · 조선인	63 만인
○재일한국 · 조선고령자	약 9 만인
○재일한국 · 조선고령자무연금자	약 6 만인
○재일한국 · 조선인의 결혼	85%가 일본인과 결혼
○재일한국 · 조선인의 귀화	약 1 만인

## 2) 필요로하고 있는 건설지역과 재일코리언 등록자수

동경(東京)	100,870 명
요코하마(横浜)	32,201 명
나고야(名古屋)	50,180 명
교토(京都)	43,522 명
오사카(大阪)	166,232 명
히로시마(廣島)	14,445 명
후쿠오카(福岡)	23,485 명

## 5. 재일코리언 노인홈 “고향의 집” 의 사업개요

### 1) 연 혁

- 1982.3 한국공생복지재단 동경사무소 개설하여 마음의가족 운동실시
- 1984.6 사회사업가 윤기씨가 재일한국인 노인홈 건설을 제창
- 1985.2 일본의 복지계, 교육계, 종교계, 정계, 경제계, 문화계, 사회 단체대표 500 명의 발기인으로 재일한국인 양노원 만드는회 발족
- 1987.7 大阪사무소 개설
- 1988.9 사회복지법인 ‘마음의 가족’ 인가
- 1989.10 ‘고향의집’ 준공 ‘고향의집’ 및 ‘고향의집 진료소’ 개설
- 1994.6 大阪市生野区 ‘고향의집’ 주간보호센터 및 재가복지지원센터 개설
- 1996.4 ‘고향의집’ 증축
- 2001.2 神戸市長田区에 ‘고향의집·神戸’ 신축
- 2001.3 神戸市長田区에있는 眞野주간보호센터및 고령자주택 관리위탁

### 2) 사업내용 및 서비스지역과 정원

지역정원 사업명	堺地域	大阪地域	神戸地域	計
특별양호노인홈	80 명	0	58 명	138 명
단기입소시설	10 명	0	12 명	22 명
주간보호사업	20 명	30 명	30 명	80 명
헬퍼파견사업	30 명	30 명	30 명	90 명
재가복지지원사업	상담사업	상담사업	0	0
홈헬퍼 2 급양성사업	70 명	0	70 명	140 명
	210 명	60 명	200 명	470 명

## 6. 재일코리아노인홈 “고향의 집” 의 활동

### ◆ 고향(복지시설) 만들기

- (1) 제 1 차계획 (1985 년~1989 년) ‘고향의집’ 정원 55 명 (특별양호노인홈)
- (2) 제 2 차계획 (1992 년~1993 년) ‘고향의집 데이서비스센터’ (데이서비스센터)
- (3) 제 3 차계획 (1994 년~1995 년) ‘고향의집’ 증축 정원 80 명 (특별양호노인홈)
- (4) 제 4 차계획 (1996 년~2001 년) ‘고향의집·고베’ 정원 58 명(특별양호노인홈)
- (5) 제 5 차계획 (2003 년~2005 년) ‘고향의집·네리마(練馬)’ 정원 70 명 ( ” )

### ◆ 복지문화 만들기

#### (1) 도서출판

- “어머니여 그리고 자식들이여” (윤기著·1993)
- “바람이 지나가는 길” (윤기著·중앙법규출판·2001)
- “양이 한마리” (田內 文枝著·크리스찬신문)
- “고향의 집 사람들” (고향의 집 10 주년 기념지)

#### (2) 영화제작

##### · 제작취지

- ① 한일의 불행한 역사속에서도 아픔을 달래주는 사랑이야말로 화해와 친선을 가져다 준다.
- ② 식민지시대부터 지금까지 국경을 넘어 사랑을 실현한 다우치 지즈코(田內 千鶴子)와 아이들을 그려 많은 사람들에게 희망과 용기를 안겨다 준다.
- ③ 한일의 올바른 역사를 생각하며 함께 사는 마음을 넓힌다.

##### · 영화의 성과

###### <표 창>

- 1996 년 일본 후생부장관상 (아동복지문학상)
- 1997 년 야마지 후미꼬(山路 ふみ子)상(복지상)
- 1998 년 일본 카톨릭영화상  
일본 대중문화 한국상영 허가 제 1 호 작품
- 1999 년 일본영화비평가 아시아친선작품상

###### <상 영>

일본 전국 700 개 지역에서 상영되어 복지의 원점을 계몽

#### (3) 국제사회복지 세미나

한일양국의 복지관계자 관·학·민이 합동으로 모여 의견교환을 하며 교류하는 목적으로 1987년 10월에 제 1 회 국제사회복지세미나를 제주도에서 개최한 이래 지금까지 9 회 개최되었다.

## ◆ 복지인재 만들기

### (1) 홈헬퍼 2급 양성(堺・神戸)

“고향의 집”은 2000년부터, “고향의집·고베”는 2004년부터 실시하여 현재, 총 253명 수료했다.

### (2) 국제사회복지연수

한국의 복지관계자(공무원, 교수, 학생, 복지시설종사자, 교회)를 대상으로 일본의 복지를 올바르게 이해시켜 상호교류를 도모하는 것을 목적으로 일본 각 행정, 교육, 시설등의 견학과 강의를 중심으로 1992년부터 현재까지 43기로 총 614명이 연수를 수료했다.

### (3) “고향의집” 직원연수

- 시설내 직원연수(매월 1회)
- 한국복지 현장연수(연 1회)
- 기타 국내 각종연수 - 직원 1인 1회 참가 목표

## ◆ 복지시민 만들기

### (1) 한일마음의 교류강좌

- 제 1 회      장소-오사카국제회의장(2003.11)  
              테마 “만혼·일한비교 독신시대를 산다” ---강사 변 화순
- 제 2 회      장소-오사카국제회의장(2003.12)  
              테마 “아동학대 국제비교” ---강사 김 성이
- 제 3 회      장소-오사카국제회의장(2004.1)  
              테마 “노후의 일한비교” ---강사 박 재간
- 제 4 회      장소-오사카국제회의장(2004.2)  
              테마 “새로운시대 새로운 양육을” ---강사 오오히나타 마사미
- 제 5 회      장소-오사카국제회의장(2004.3)  
              테마 “앞으로의 가족” ---강사 히구치 게이코
- 제 6 회      장소-특별양호노인홈 고향의집(2004.4)  
              테마 “김치는 가정의 맛(김치강습)” ---강사 김 유미

### (2) 한일마음의 교류 심포지움

- 제 1 회      장 소-한국 제주도 라마다프라자제주호텔(2003.12)  
              테 마 “쇼셜워커의 전문성의 개발과 장래전망”
- 제 2 회      장 소-일본 오사카 리가로얄호텔오사카(2004.12)  
              테 마 “고령자복지시설에 있어서 쇼셜워커의 위치와 역할  
                  (지역복지의 시점에서)”

## 7. 재일코리언의 고령자복지의 과제

### 1) 무연금 고령자의 문제

2004년 5월 30일 발족한 “재일코리언고령자생활지원네트워크·하나”에 의하면, 현재 62만 5천명의 한국·조선인 속에 13%, 약 81,000명이 65세 이상의 고령자라는 발표가 있었다.

약 6만명이 무연금자로서 방치되어 있다고 한다. 강제적으로 조국을 떠나게 되어, 종전후에도 어쩔 수 없이 이향에 머물수 밖에 없었던 在日의 할아버지, 할머니, 아버지, 어머니들은 일본에 의한 조선식민지 지배의 희생자이다.

戰後의 일본사회는, 지금까지 주민으로서 일본에서 살아온 재일코리언에 대해 戰前과 별 차이없는 차별과 동화정책을 취하고 있다. 재일코리언은 체류자격을 포함한 법적지위, 사회보장, 교육제도, 취업 등, 다양한 면에 있어서 권리가 막혀있다. 국민연금제도에서 국적조항이 철폐되어 국민연금에 가입할 수 있게 된 것이 전후 37년후의 1982년부터였다. 그러나 그때 이미 고령이 된 재일코리언은 구제조치를 취하지 않은 채, 무연금상태에 놓여있다.

### 2) 재일코리언을 시야에 넣은 개호서비스의 운영의 필요

2000년 4월부터 도입된 개호보험제도도 생활습관이나 문화가 다른 재일코리언을 시야에 넣지않고 시작되었다. 무연금의 고령자에 있어서는 이 제도는 부담일 뿐이다. 재일코리언 고령자에 있어서 일본인을 위해 준비된 개호보험 서비스는 생활문화, 관습 등의 차이에 익숙해 지지 못하고, 개호보험료를 지불하면서도 서비스를 이용하기 어려운 상태이다. 이러한 부조리한 실태를 개선하고자 2,3세가 재일코리언고령자의 생활지원을 위해, 생활실태 및 코리언의 특성을 배려한 사회복지서비스를 전개하기 시작하였다.

### 3) 그 외에도 재일코리언을 위한 복지시설의 정비, 국제사회복지 전문가·케어 매니저·개호복지사 양성, 재일코리언의 복지서비스를 위한 가이드북 개발, 대학원·학부과정에서 異文化·多文化복지 체험 등이 필요하다.

## 8. 새로운 발견, 민단은 지역의 복지관 - 在日의 복지네트워크 만들기

### 1) 지역복지의 추진

후생노동성 사회원호국장의 마노 아키라(真野章)씨는 “오늘 일본은 少子高

齡化의 도래와 함께 지역사회의 변용 등에 의해 고령자, 장애자들의 생활상의 지원을 필요로 하는 사람들은 한층 더 어려운 상황에 놓여 있다. (중략) 주민생활의 안심과 안전을 실현하기 위해서는 사람들의 생활거점인 지역에 뿌리를 내리며 서로가 도와주면서 각각 지역에서 누구나 그 사람답게 안심하고 충실된 생활을 보낼 수 있는 지역사회를 실현하여 이 지역사회를 기반으로 한 복지 즉, ‘지역복지’를 추진하는 것이 매우 중요하게 여겨지고 있다.” 라고 말하고 있다.

## 2) 후생성사회원호국 사회복지형태에 관한 검토회 위원으로서

2000년 12월에 나도 위원으로서 참가하여 당시의 후생성이 정리한 “사회적인 원호를 요하는 사람들에 대한 복지의 형태에 관한 검토회”의 보고서에 있어서도 “지역사회에 있어서의 ‘연계’의 재구축”이 큰 테마였다.

‘연계’를 생각할 때 일본인이 생각하지 못한 중요한 단체가 있다. 그것은 재일대한민국민단이며 산하에 47개의 지방본부와 300개가 넘는 지부 회관이 있다. 지방자치체의 보조도 없이 재일한국인 1세들의 피와 땀으로 만들어 낸 회관은 재일한국인뿐만 아니라 지역사회의 귀중한 자원이며 보물이다.

그러나 재일코리언사회도 크게 변화하고 있다. (1)일본과 한국과의 정세의 변화, (2)재일코리언공동체의 구성인의 변화, 1세부터 4세가 되어 결혼도 85%가 일본인과 하고 있다. (3)재일코리언의 가치관의 변화, (4)소자·고령사회를 맞이하여 지역복지계획이 추진, (5)세계적으로 다문화공생시대가 되어 가고 있음을 감안할때 코리아·재팬커뮤니티센터와 같은 것이 시대적으로 필요로 하고 있다고 본다.

## 2002년 2월 오사카부 지역복지 지원계획검토회에서 다음과 같이 제안했다.

- (1) 현재, 민생위원·아동위원은 특별공무원으로 재일외국인은 참가할 수 없다. 오사카부에서는 지역의 특색을 감안하여 오사카부 독자적으로 특별히 민생위원으로서 참가할 수 있는 길을 개방한다.
- (2) 구미의 여러나라에서는 교회의 목사는 지역의 리더의 자격을 가지고 지역의 자원으로 활용되고 있다. 오사카부에 있어서 재일외국인의 변호사·의사·교사·간호사·소셜워커·목사·스님·재일외국단체의 사무국장(오사카부에는 한국민단 36 지부가 있음)등을 외국인 상담원으로서 활용하여 오사카부민으로서 긍지를 갖도록 한다.
- (3) 지역복지만들기의 일환으로서 한국민단·조선총련의 각 지부에 데이서비



스, 그룹홈 등을 위탁한다.

- (4) 외국인 전문 소셜위커를 육성한다.
- (5) 오사카부 외국인 종합복지서비스 센터의 창설 등이다.
- (6) 기타

### 3) 재일한국인 복지프로그램 간담회 개최

2002년 5월에는 고향의 집에서 한국으로부터 사회복지 전문가들을 초청하여 민단간부와 함께 재일코리언의 복지와 지역사회의 공생을 생각하는 “재일한국인 복지프로그램 간담회”를 개최했다(참석자로서, 구문호(민단 중앙본부 부단장), 김기주(민단 오사카부분부 전 감찰위원장), 정호영(민단 사카이지부 支團長), 오시중(민단 사카이지부 副支團長), 정현태(민단 사카이지부 전 支團長), 김영호(한국 강남대학교 사회복지학과 교수), 이종해(인천영락원 원장), 박상신(한국사회복지관협회 회장), 최성균(한국사회복지사협회 회장), 다카하시 시게히로(高橋重宏, 일본사회복지사업대학 교수), 고바시 히로코(小橋弘子, 자원봉사 음악세리피스트), 다우치 후미에(田内 文枝, 특별양호 노인홈'고향의 집' 종합시설장), 윤 기(사회복지법인 마음의 가족 이사장)등이 참석).

센터의 이용은 재일코리언과 지역 일본사람이 같은 조건으로 이용할 수 있는 것으로 한다.

그 결과, 한국사회복지사협회는 그 해 6월, 한국보건복지부장관에게 해외동포 3만명에 한명의 사회복지사를 파견하여 해외동포 복지문제를 전문적으로 담당하도록 건의했다. 한국의 복지관은 그 수가 600개를 넘어 전문사회복지사들에 의해 발전되었다. 최근에는 일본의 사회복지관계자도 주목하고 있다.

## 9. 앞으로 바람직한 재일코리언 공동체의 새로운 기능과 역할

### 1) 코리아·재팬커뮤니티센터의 사업의 내용

- (1) 지역복지사업
- (2) 상담사업
- (3) 재가복지사업(홈헬퍼서비스·데이케어서비스)
- (4) 사회(모국어 포함)및 문화교육사업
- (5) 경로회 활성화와 노인복지사업의 후원활동

- (6) 청소년 건전육성을 위한 지원사업
- (7) 자원봉사의 육성과 조직화사업
- (8) 조사·연구사업
- (9) 국제교류사업
- (10) 체육(레크레이션 포함)진흥사업
- (11) 인권과 권익을 함양하는 토론의 광장
- (12) 기타

## 2) 사업의 효과

- (1) 공동체의 서비스가 활성화한다.
- (2) 지역사회에 봉사하는 공동체로서 부각한다.
- (3) 공동체가 자립해 갈 수 있다.
- (4) 공동체를 통해서 고용창출의 기회가 증가한다.
- (5) 공동체를 통해서 국제교류와 협력이 촉진된다.
- (6) 공동체를 통해서 인재육성과 지도력 창달이 촉진된다.
- (7) 공동체를 통해서 경영의 전문화를 도모한다.

코리언 공동체는 인적, 물적, 지적 자원을 총동원해서 장래에 있어서도 역동적인 조직체로서 새롭게 그리고 효율적으로 추진하기 위해서는 사회복지사(Social Worker)의 파견내지 지역사회복지사(Community Social Worker)의 양성이 필요하다.

## 10. 한사람의 소셜워커로서

오사카, 고베, 도쿄지역에서 20년 간 사회사업가로서 일하면서 다음과 같은 점을 느꼈다. 일본에서 생활하고 있는 한국어를 모국어로 하는 재일코리언에게 있어서 현행 사회복지서비스를 이용하기에는 언어 문화등에 큰 벽이 있어 대단히 어렵다는 것이다.

특히 사회복지를 실시하고 있는 복지사무소나 사회복지협의회 사회복지시설과 기관들이 재일외국인들에게 필요한 서비스를 제공하고자 하는 움직임이 없다. 적당한 인재가 없다는 등, 예산이 한정되어 있는 것이 그 원인이겠지 만 독창적인 서비스를 계획하여 재일외국인에게 원조의 손길을 내미는 자세가 없는 것이 근본적인 이유라 하겠다.

특히 재일외국인중에서도 그 비중이 많은 재일코리언은 모습이 비슷하고

생활습관이나 문화도 불교와 유교의 정신등이 비슷하고 또 문화라는 개념에 의미가 분명하게 인식하기 어려운 면에서 문화의 문제를 사회복지의 실천과 연결해서 생각하는 것이 거의 없었기 때문이다.

앞으로 사회복지사 또는 지역사회복지사가 그 지역에서 다음과 같은 인식, 발상이 필요하다고 본다.

## 재일외국인은 일본사회에 플러스가 된다

- 1) 재일외국인을 둘러싼 과제의 전제는 외국인의 존재로 인하여 지역이 다양화 되고 다문화 공생을 촉진시킨다는 것을 인식할 필요가 있다.
- 2) 복지의 목적은 자립과 독립, 자기결정이 되고 자유롭게 되는 것이며 자기실현을 달성하는 것이다. 지역복지는 이러한 목표를 위해 환경을 만들어가는 것이 중요하다.
- 3) 재일외국인의 건전한 커뮤니티를 형성함에 따라 외국인 개인, 가정, 조직, 네트워크 등 역량을 높이며 일본사회의 유용한 인재로서 공헌할 수 있다.
- 4) 복지서비스는 휴먼서비스이며 그 서비스 대상은 사람이다. 사람의 건전한 자기실현은 그 사람의 문화적 기반위에서 달성된다. 그 사람의 건전한 라이프스타일이나 아이덴티티도 그 사람이 가지고 있는 특유한 문화에 의해서 형성된다.
- 5) 구미에서 마이너리티에 대한 복지서비스는 마이너리티문화에 기초하여 개인의 아이덴티티를 형성하는 것에서부터 시작한다. 그 아이덴티티의 형성에 중요한 환경은 가족과 마이너리티 커뮤니티이다.
- 6) 건전한 아이덴티티 형성은 건전한 생산적 인간을 만드는 것이 기본이다.
- 7) 구미에 있어서의 사회복지 시스템의 기본은 가정중심적이면서 지역을 기반으로 하는 지역복지다. 이 지역복지는 주민주체를 원칙으로 지역 그 자체가 여러가지 문제를 해결하는 능력, 역량을 가지고 있다.

## 소셜인클루전(Social inclusion)의 이념의 실현을 향해서

사회구조의 급격한 변화속에서 사회에서 소외되고, 배제되는 사람들을 포용하는 소셜인클루전(Social inclusion)의 개념에 주목하고 있다. 이것은 정신, 지적, 신체의 장애가 있는 고령자, 아동, 실업 및 빈곤, 약물의존 등의 문제를 안고 있는 사람들, 색실마이너리티, 정주외국인 등이 함께 살아가는 풍요로운 사회를 만

들어 가는 새로운 움직임이다.

국제화(Globalization)를 기초로 급속하게 진전되는 도시화, 시장화, 정보화는 인간과 인간의 연결을 단절시키고, 인간과 인간의 격차를 넓히고 있다. 복잡다양함 속에서 분단과 격차를 만들어내는 구조를 해소시켜, 모든 사람이 평등하게 사회속에서 받아들여 질 수 있도록 하기위해 등장한 것이 소셜인쿠루전(Social inclusion)의 개념이다. 최근, 프랑스, 영국을 시작으로 유럽의 여러나라들은 공공정책을 추진하는데 키워드가 되고 있다.

일본은 본래 “동일” 한 것에 집착하고, 우열에 신경쓰며, 경제우선의 과열 등 편중이 심하여, 그 왜곡이 불거져나오는 사회가 되어가고 있다. 지금까지의 사회에서 소외·배제된 사람들의 문제만이 아니라 불황에 의한 명예퇴직, 집단 따돌림, 대인기피 등의 새로운 문제가 발생하고 있는 속에서 새로운 소셜인쿠루전을 키워드로 살기좋은 사회를 만들어 가는 것이 요구되고 있다.

“고향의 집”은 “다름”과 “다름”을 살린 문화의 힘으로 연결하여 다양한 사회를 실현하는 것이 중요하다고 본다. 문화는 한 사람 한 사람의 존재의 차이를 두드러지게 함과 동시에 사람과 사람을 연결하는 힘이 있기 때문이다.

지역사회 속에 존재하면서 지역사회 속에서 받아들여지지 못했던 사람들이 지역사회 속으로 들어간다는 새로운 복지문화가 필요하다.

## 프로필

윤 기 (尹 基)

일본 사회복지법인 마음의 가족 이사장

### 학력 및 경력

- 1966 년 2 월 한국 중앙신학교 사회사업학과 졸업(현 강남대)
- 1968 년 11 월 한국 사회복지법인 목포공생원장 취임
- 1978 년 5 월 한국 사회복지법인 공생복지재단 이사장 취임
- 1979 년 7 월 한국 사회복지법인 공생복지재단 회장 취임
- 1979 년 7 월 한국기독교사회복지학회 상무이사
- 1983 년 4 월 한국 사회복지법인 은평천사원 이사 취임 ~ 현재
- 1987 년 ~ 91 년 5 월 사단법인 한국사회복지사협회 부회장, 회장 역임
- 1988 년 10 월 일본사회복지법인 마음의 가족 이사장 취임 ~ 현재
- 1995 년 10 월 일본 영화 사랑의 목시록 세계로 보내는 모임 대표
- 2000 년 7 월 일본후생성사회국 사회복지형태에 관한 검토회 위원 역임
- 2001 년 4 월 한국사회복지법인 공생복지재단 명예회장 취임
- 2003 년 한국민단복지추진위원
- 2004 년 3 월 일본소셜인쿠루전연구회 운영위원
- 2004 년 6 월 재일코리아고령자생활지원네트워크하나 공동대표

### 상훈

- 1978 년 2 월 한국 제 22 회 소파상 받음
- 1979 년 5 월 한국 서울특별시장 감사장 수상
- 1979 년 6 월 대한민국정부로부터 국민포상 받음
- 1992 년 5 월 한국 강남대학교총장 공로패 수상
- 1996 년 3 월 일본 오사카 상공회의소 “프랜드리시티 오사카 대상” 준대상수상
- 1997 년 10 월 한국복지신문사로부터 세계평화복지인물상 수상
- 1998 년 8 월 주오사카 대한민국 총영사로부터 감사장
- 2000 년 5 월 일본 오사카부지사 표창
- 2000 년 10 월 일본 마이니치신문사 “마이니치 사회복지상” 받음
- 2001 년 5 월 한국 보건복지부장관 표창장 받음
- 10 월 일본재단 사회공헌지원재단 “사회공헌상” 받음
- 2002 년 3 월 국제교류기금 “지역교류진흥상” 받음

### 저서

- “어머니는 바보야” (홍성사 영화 '사랑의 목시록' 원작)
- “김치와 우메보시” (예지 출판)
- “괴짜총리 고이즈미, 흔들리는 일본” (번역 · 예지 출판)
- “김대중 생산적복지에의 길” (번역 · 매일신문사 출판)